

お お ぞ ら

No. 169

聖隷福祉事業団への法人移管後は52号

社会福祉法人 聖隷福祉事業団
総合病院 聖隷三方原病院
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功
編集者 横地健治

2015年8月1日

施設内の一日の生活

横地 健治

入所している重症心身障害児(者)は、一日中施設内で生活しています(特別支援学校に通学している小児は例外ですが)。健康成人や学齢小児では、家庭から職場や学校に行き、また家庭に戻ってくる生活を繰り返しています。そして、家庭では、家族とともに過ごす時間と、一人だけになる時間を使い分けています。それでは、一日中施設内で生活している重症心身障害児(者)では、一日の生活をどのように設定したら、この人たちが良い人生を送っているとと言えるでしょうか。

重症心身障害があり施設入所していても、健常者と同じように、人との関わりを経験し、生きる意義を感じてもらわなければならぬと私は考えます。これが重症心身障害にとつての「社会参加」と思っています。一日中施設内においても、これは保障されねばなりません。そうすると、入所者は施設内において、個としての生活と社会生活が両立していかねばならないこととなります。

このためには、まず、昼間

の生活と夜の生活が区別されていなければなりません。眠る時間以外では、ベッドから離れて過ごすのが原則です。ただし、ベッド回りに人工呼吸器などの医療機器がびっしり付いている人では、これらの付け替え時に起こりうる問題のため、例外にせざるをえないとは思っています。そうした人は、ベッドごと居場所を変えることもありえます。また、同じ場所においても、ベッド回りと室内の様子を変え、昼間の生活を設定すべきと考えます。

昼間の時間で、重症心身障害児(者)では、食事・排泄・整容・更衣といった基本的な日常活動(ADL)、医療的ケア、リハビリなどに多くの時間を要します。これはいづれも、良い生活の基盤作りをするものであり、良い生活は、これ以外の活動から成り立っています。生活のなかで、最も価値が高いと私たちが考えているのは、職員と1対1で行われる「生きがい活動」です(繰り返し本通信で述べています)。これも昼間の時間を過ごす同じ場所で行われ

ばいいと考えます。その理由は、同じ場所にいる他の入所者が興味を引く対象としては、この活動が最適なものだからです。生きがい活動こそは個人の生活の最たるものです。同時に、それを見ることは、見る人の社会的生活としては価値の高いものになります。言い換えれば、「一般的生活活動」「生きがい活動」以外の活動を私たちはこう呼んでいます。これも本通信で述べています(の最たるものでもありません)。

昼間の生活をどのくらいの数の人たちと過ごすのが適当でしょうか。私たちの施設は、「ゾーン」と呼ぶ居住単位からなっています。1ゾーンは15名程度からなっています(本年4月発足の新しい「うらら」は、変則的にこれより大きくなっていますが、実際は3ゾーンの集合です)。そうして、昼間の生活単位は5名程度のグループからなっています。この入所者と担当職員が加わり、擬似的な社会の単位となっています。この中の営みをもって、入所者の「社会参加」と考えています。同じグループの人たちがどのような距離でいれば、互いに意識し、コミュニケーション(非言語的コミュニケーション

ションですが)をとる関係になるのでしょうか。もちろん向き合える姿勢介助を職員が充分に行つての話です。健常者では、特別好きでも嫌いでもない人と向かい合つて話をする距離はだいたい決まっています。60-70cmぐらいでしょうか。入所者でも、このくらいの距離が、見聞きし、感じ、気持ちを伝え合うには適していると思います。

昼間の生活のなかで見聞きする対象のうち、最上位の価値を有するものは人だと考えています。前述した生きがい活動をしている他人入所者と職員はそれに当たります。それ以外の入所者や職員の振る舞いも重要な対象です。その他、動くもの(動物、おもちゃなど)、ぬいぐるみ、絵などは見る対象です。また、人の声、動物の声、自然の音、楽器の音などは聞く対象です。健常者ではこれらは自分で選んで見聞きします。これに対し、重症心身障害児(者)では、ほぼすべての対象を職員が選んで、見聞きできるようにしなければなりません。例えば、ベッドで上を向いて寝ているだけなら、まわりを歩く人は一人として見えないこととなります。一見受動的な経験も、すべて職員の働きにかかつて